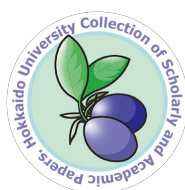




Title	ハムレット, 復讐への道筋 : 深まる殺意の劇構造
Author(s)	宮下, 弥生
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 153, 23 (左) -49 (左)
Issue Date	2017-11-20
DOI	https://doi.org/10.14943/bgsl.153.l23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67942
Type	departmental bulletin paper
File Information	153_02_miyashita.pdf



ハムレット、復讐への道筋 —— 深まる殺意の劇構造

宮 下 弥 生

1. 問題の所在

Hamlet は結末に至るまで Claudius 殺害に向けて策を練ることも、具体的な行動を取ることもない。3幕3場では祈りの最中の Claudius に向けた刃を鞘に戻してさえしもう。また、最後によりやく果たされる復讐も偶然の結果の感を呈しているということもあり、この作品が復讐劇という範疇にありながら、Hamlet の行動力のなさがこれまで大きな問題となってきた。これに対する一つの答えとして、フロイトのオイディプス・コンプレックスによる説明は非常に影響力のあるものであった。「父を殺して母と寝る」という無意識の願望を Claudius はすでに成し遂げており、Hamlet はそれに対する劣等感や自己非難から行動に移せないという見解である¹。しかし、Hamlet が Gertrude にどれだけの性愛を感じているのか疑問であり、一方、Hamlet は劇中一貫して父親への敬愛の念を示していることから、この説明は全面的に受け入れられるものではない。また、宗教的に復讐が禁じられているからだという見解、つまり、新約聖書の「自ら復讐してはならない。なぜなら『復讐はわたしのすることである。わたしが報復する』と主は言われた」という「ローマ人への手紙」第12章第19節を復讐禁止のよりどころとする立場がある。復讐するものはこの教えを守らず、人間の分を超えて神の権限に踏み込むものだと考えられていた²。しかし、これは聖書や社会通念という作品の外部に根拠を求めるものである。Harold Jenkins は Hamlet の逡巡をめ

10.14943/bgsl.153.l23

ぐる議論に疑問を呈し、3幕3場の見逃しの行為について Hamlet の主張する「祈りの最中に殺したのでは Claudius を天国にやっしまい、復讐にはならない」という姿勢をその意図の通り解釈すべきだと述べているが³、この意見を持ってしても釈然としない感覚が残るのも事実であろう³。R. A. Foakes は、3幕4場での Polonius 殺しも結末での Claudius への復讐も衝動的で、熟慮の末のものではなく、この劇自体を暴力性に欠けるものだとしている。Hamlet は復讐に駆り立てる古典的な英雄のコードと復讐を非難するキリスト教のコードとの板挟みになっており、この Hamlet の葛藤を採求することで、劇は人間の持つ暴力性の問題と道義的に行為に移すことができない限界について深く洞察していると述べている⁴。このように行動しない Hamlet 像が大前提として受け入れられてきた。

本論は作品全体に一貫して流れている Hamlet と Claudius の意図の衝突をたどることで、Hamlet の行為の遅さ“tardiness”について一定の視座を得ることを目標とする⁵。まず、Hamlet に与えられた復讐への動機、それに抗するだけの能力を持つ Claudius の人物像を検討した上で、Hamlet に課された復讐の性質を確認し、二人の意図のせめぎ合いを劇の展開に沿って考察し、Hamlet が最後に手にした復讐の手段がたまたまの偶然だったのか、あるいはあらかじめ規定された必然であったのかを論じたい。

2. Hamlet に与えられている動機

この作品は、他の多くの復讐劇と異なり、劇が始まる前にすでに復讐の発端となる殺人が行われているが、このことは作品の構造や登場人物の意識の描かれ方に大きな影響を与えている。Caroline Spurgeon は *Shakespeare's Imagery and What it Tells us* の中で、Hamlet においては「健康な肉体を蝕む、目に見えない腐敗」が作品全体を支配していると説明している。

By recurrent imagery I mean the repetition of an idea or picture in the images used in any one play. Thus in *Romeo and Juliet* the dominating image is light with its background of darkness, while in

Hamlet there hovers all through the play in both words and word pictures the conception of disease, especially of a *hidden corruption infecting and destroying a wholesome body*.

(Spurgeon, 213, emphasis added)⁶

劇が始まる前にすでに殺人が行われていることにより、劇はその腐敗した状況から始まることになる。劇の始まりでその舞台がどう腐敗しているのだろうか。まず、1幕4場で亡霊が二度目に登場したとき、Marcellus はデンマークに「腐った」ものを見出し、Horatio は神がこの国を導くようにと祈る。

MARCELLUS Something is *rotten* in the state of Denmark.

HORATIO Heaven will direct it. (1.4.90-91 emphasis added)

1幕5場で亡霊は Hamlet に自分が弟の Claudius に殺されたことを知らせる。

GHOST 'Tis given out that, sleeping in my orchard,

A serpent stung me. So the whole ear of Denmark

Is by a forged process of my death

Rankly abused. But know, thou noble youth,

The serpent that did sting thy father's life

Now wears his crown. (1.5.35-40, emphasis added)

自分は蛇に噛まれて亡くなったことにされ、デンマーク中の者たちの耳が騙されているのであるが、ここで“Rankly”という副詞を用いることで、殺人のみならず、事実が歪められ隠蔽されている様が悪臭を放つ程強烈な悪であることが示唆されている。

Claudius の先王殺害はデンマークという国家のみならず、その王子 Hamlet の精神状態にも大きな影響を与えている。Spurgeon は Claudius の先王殺害と Gertrude の振る舞いが Hamlet に大きなショックを与え、劇が始まったときにはすでに Hamlet は「内的に死にかけている」と述べている。

This image pictures and reflects not only the outward condition which causes Hamlet's spiritual illness, but also his own state.

Indeed, the shock of the discovery of his father's murder and the

sight of his mother's conduct have been such that when the play opens Hamlet has already begun to die, to die internally; because all the springs of life—love, laughter, joy, hope, belief in others—are becoming frozen at their source, are being gradually infected by the disease of the spirit which is—unknown to him—killing him.

(Spurgeon, 318)

つまり、生のあらゆる源である、愛、笑い、喜び、希望、他の者たちへの信頼が、その根源で凍り付いてしまっているからだという。この指摘は非常に的確で、この劇が始まったとき、Claudiusの先王殺害はすでに過去のものとなっている一方で、劇が始まる前の健全な状態を振り返って推測させるという構造にもなっている。息子 Hamlet によれば、先王 Hamlet は妻をととても愛し、その顔に風が強く当たるのも許さなかった。妻 Gertrude も、満たされることで愛したい欲求がますますつのっていくように、王にしがみついていたものだった。

HAMLET But two months dead—nay not so much, not two—

So excellent a king, that was to this

Hyperion to a satyr, *so loving to my mother*

That he might not beteem the winds of heaven

Visit her face too roughly. Heaven and earth,

Must I remember? Why, *she should hang on him*

As if increase of appetite had grown

By what it fed on. And yet within a month

(Let me not think on't—*Frailty, thy name is Woman*),

A little month, or e'er those shoes were old

With which she followed my poor father's body,

Like Niobe, all tears. (1.2.138-49, emphasis added)⁷

しかし、3幕4場に見る Hamlet の Gertrude 非難は、神々しい先王と下劣で野卑な Claudius を比較することで、彼女の墮落した愛を痛烈に暴き出している。さて、ここで“Frailty, thy name is Woman”と Hamlet が弱さを女性

一般のものと見なしていることは重要である。Gertrude に対する不信感は、女性不信・愛情不信へと変化し、自身の Ophelia に対する愛情に決定的な影響を与えたと一般的に考えられており、またその通りであろう。G. Wilson Knight は 1 幕 3 場、Polonius から Hamlet との関係を問い詰められた Ophelia の言葉は、Hamlet が亡霊と出会う前、おそらくは先王の死の前のことだっただろうと述べているが、以前は Hamlet と Ophelia の間で健全な愛が育まれていたことが伺える⁸。

OPHELIA He hath, my lord, of late made many tenders
Of his affection to me. (1.3.98-99)

OPHELIA My lord, he hath importuned me with love
In honourable fashion. (1.3.109-10)

OPHELIA And hath given countenance to his speech, my lord,
With almost all the holy vows of heaven. (1.3.112-13)

ところが、Hamlet が亡霊と会った後の 2 幕 1 場で Ophelia が語る Hamlet の様子は大きく変化している。Hamlet は Ophelia の手首をつかみ、終始無言でじっと彼女の顔を見続ける。

OPHELIA He took me by the wrist and held me hard,
Then goes he to the length of all his arm
And with his other hand thus o'er his brow
He falls to such perusal of my face
As 'a would draw it. Long stayed he so;
At last, a little shaking of mine arm
And thrice his head thus waving up and down,
He raised a sigh so piteous and profound
As it did seem *to shatter all his bulk*
And end his being. That done, he lets me go
And with his head over his shoulder turned
He seemed to find his way without his eyes
(For out o'doors he went without their helps)

And to the last bended their light on me.

(2.1.84-97, emphasis added.)

ここでは Ophelia と Hamlet とのやり取りは演じられるのではなく、Ophelia が Polonius に Hamlet の様子を報告するという形を取っている。演じられなかったからこそ、この動作をしたとき、Hamlet は何を考えていたのだろうと、観客は Hamlet の深く強烈な心の動きを思い描くように促されている。その思いは Hamlet の「肉体を打ち碎き、その存在を終わらせる」ほどのものであったとことが、Ophelia にはなぜなのかわからないにせよ、報告される。後にまた 3 幕 1 場で Ophelia は「狂ってしまった」Hamlet の変わり様を嘆くのであるが、Hamlet の狂気を装って周囲を欺こうという意図を越えた、Hamlet の内面の変化を Ophelia は確実に見抜いている。

OPHELIA O, what a noble mind is here o'erthrown!

The courtier's, soldier's, scholar's eye, tongue, sword,

Th'expectation and rose of the fair state,

The glass of fashion and the mould of form,

Th'observed of all observers, quite, quite down.

And I, of ladies most deject and wretched,

That sucked the honey of his musicked vows,

Now see what noble and most sovereign reason

Like sweet bells jangled out of tune and harsh—

That unmatched form and stature of blown youth

Blasted with ecstasy. O woe is me

T'have seen what I have seen, see what I see. (3.1.149-160)

この科白でも、過去の Hamlet (下線部) と変わり果ててしまった今の姿 (二重下線部) が対比されているのは効果的である。

以上見てきたように、Claudius の先王殺害に始まる一連の事柄は、Hamlet を本質的に変えてしまった。単に父親を殺されたからその復讐をするというのではなく、Hamlet 自身もその存在に関る程の精神的な打撃を受けての復讐なのである。加えて、亡霊と会った後 Hamlet は、自分の命はデンマーク

の腐敗した状況、「関節が外れてしまった」状況を正すためにあるのだと、その運命を呪いつつも宣言する。

HAMLET The time is out of joint; O cursed spite

That ever I was born to set it right! (1.5.186-87)

劇中、Hamlet はこれだけの動機を与えられて、Claudius に立ち向かうことになる。

3. 敵対者となれるだけの Claudius の資質 —— 卑劣さと有能さ

対する Claudius は卑劣さと有能さを合わせ持った人物として呈示される。Claudius が初めて登場する 2 幕 1 場冒頭に、その性質が簡潔に表現されている。

KING Though yet of Hamlet our dear brother's death

The memory be green, and that it us befitted

To bear our hearts in grief, and our whole kingdom

To be contracted in one brow of woe,

Yet so far hath discretion fought with nature

That we with wisest sorrow think on him

Together with remembrance of ourselves.

Therefore our sometime sister, now our Queen,

Th'imperial jointress to this warlike state,

Have we, as 'twere with a defeated joy,

With an auspicious and a dropping eye,

With mirth in funeral and with dirge in marriage,

In equal scale weighing delight and dole,

Taken to wife. Nor have we herein barred

Your better wisdoms, which have freely gone

With this affair along. For all, our thanks. (1.2.1-16)

この科白の背後には、Claudius が兄を殺した後、兄の家臣たちを見事に自分の味方に付け、深く夫を愛していたはずの Gertrude を自分の妻にし、Hamlet を退け王位についたという事実がある。兄を殺して王位を篡奪したところか、自分が王位についたのは適正な選挙の結果であるとの態度を取り、妃との結婚も公正な過程と周囲の理解を経てのことであると威厳に満ちたスピーチの中で述べている。劇中何度か差し挟まれる Fortinbras に対する政治的対応の如才のなさや、第4幕、反逆の姿勢で乗り込んで来た Laertes をうまく言いくるめて自分の手下にしてしまう経緯など、Claudius は劇中一貫して抜かりのなさ、有能さを示している。この卑劣で、なおかつ有能であるという性質が Hamlet の敵対者となりうるだけの資質として設定されているのである。

一方で、Hamlet と Claudius との戦いの間に割って入ってきて、命を失った者たちについて Hamlet の言及がある。

HAMLET — Thou *wretched*, rash, *intruding fool*, farewell:

I took thee for thy better. Take thy fortune;

Thou find'st to be too busy is some danger.

(3.4.29-31, emphasis added)

これは Hamlet と Gertrude とのやりとりを壁掛けの陰に隠れていて聞いていた Polonius を Hamlet が Claudius だと思って殺してしまったときの言葉であるが、Arden 版、第3版は“busy”を“overactive, interfering”と説明している⁹。Polonius は Claudius との真剣な戦いに「割り込んできた惨めな愚か者」であり、それは余計な介入なのである。また、イギリスで殺されることになる Rozencrantz と Guildenstern について、

HAMLET They are not near my conscience. Their defeat

Does by their own *insinuation* grow.

'Tis dangerous when *the baser nature* comes

Between the pass and fell incensed points

Of *mighty opposites*. (5.2.57-61, emphasis added)

力のある敵対者同士の間には卑しいものが割り込んできたための死であると述

べている。この人物たちはいわば Claudius の手下であり、あくまでも戦いは Hamlet 対 Claudius という “mighty opposites” 間のものである。このように、Claudius に邪悪な性質とそれを最大限に発揮できる有能さを付与したことで、彼は Hamlet の敵対者足り得ているのである。

4. Hamlet に課されている復讐の性質

こうして Hamlet は自分の存在にも関わる復讐への動機を与えられ、強力な敵を相手にするのであるが、ここで Hamlet に課されている復讐の性質とその矛盾について考察する必要がある。復讐劇一般が内包する問題として、殺人の結果引き受けた復讐では自らも殺人を犯さなくてはいけないという点がある。この矛盾について、Hamlet に復讐をせまる亡霊自身が復讐を命じるその時に述べているのは示唆的である。

GHOST List, list, O list,
 If thou didst ever thy dear father love—
HAMLET O God!
GHOST —Revenge his foul and most unnatural murder!
HAMLET Murder!
GHOST *Murder most foul—as in the best it is—*
 But this most foul, strange and unnatural.
(1.5.22–28, emphasis added)

殺人はその最良の場合ですら最も汚れたものである。また、亡霊はどのように復讐を遂行していこうと、Hamet の魂を汚してはならないと命じている。

GHOST But, howsomever thou pursues this act
Taint not thy mind nor let thy soul contrive
 Against thy mother aught; ... (1.5.84–86, emphasis added)

さらに劇レベルで考えると、Hamletの復讐はデンマークの腐敗し、それが隠蔽された状況を正すためでもある。

HAMLET The time is out of joint; O cursed spite

That ever I was born to set it right! (1.5.186-87)

劇は腐敗した状態に始まり、劇全体を通してその浄化を目指すものであるという観点からも、Hamlet の復讐には邪悪な要素があってはならないのである。このように、まず亡霊の言葉により、また腐敗からの浄化を目指す劇構造により、Hamlet の復讐には邪悪な要素があってはならないことがテキスト内に規定されている。

以上、Hamlet は劇開始前に行われた Claudius の先王殺害により引き起こされたデンマークの不正を正すことを背負わされ、また自らも本質的に変えられてしまう程の傷を受け自らの動機を持って復讐に向かうのだという点、Claudius はその敵対者たるべく邪悪でかつ有能な性質を付与されている点、しかし、不正を正す復讐には悪の要素があってはならない点を見てきた。

5. Hamlet 対 Claudius — その意図の交錯

劇中、二人の殺意は incident ごとに深まっていくが、その過程で Hamlet が邪悪な要素を決して持つことなく、最後に復讐を成し遂げるまで、二人の意図が交錯する様子を検討していきたい。

5.1 兄殺しがばれていない自信

二人が初めて登場する 1 幕 2 場からすでに二人の対立は始まっている。ここではまだ Claudius は自分が先王 Hamlet を殺したことがばれていないことを確信している。

KING *But you must know your father lost a father,*
That father lost lost his and the survivor bound
In filial obligation for some term
To do obsequious sorrow; but to persevere
In obstinate condolment is a course
Of impious stubbornness, 'tis unmanly grief,
It shows a will most incorrect to heaven,

A heart unfortified, a mind impatient,
An understanding simple and unschooled;
For what we know must be, and is as common
As any the most vulgar thing to sense—
Why should we in our peevish opposition
Take it to heart? Fie, 'tis a fault to heaven,
A fault against the dead, a fault to nature,
To reason most absurd, whose common theme
Is death of fathers, and who still hath cried,
From the first corpse till he that died today
'This must be so.' (1.2.89-106, emphasis added)

ここでは喪服を着てふさぎ込む Hamlet に対し、子は父を失うものだと一般論をぶち、あたかも先王の死は自然死、つまり運命であったかのような態度を取っている。ここで Claudius は自分の殺人を隠蔽するばかりか、内心とは裏腹に、Hamlet を慰め、教諭しようとする「父親」を演じている。一方の Hamlet は 1 幕 5 場で亡霊から殺人のことを聞いたとき、すでに Claudius の殺人を疑っていたことを明らかにする。

GHOST 'Tis given out that, sleeping in my orchard,
A serpent stung me. So the whole ear of Denmark
Is by a forged process of my death
Rankly abused. But know, thou noble youth,
The serpent that did sting thy father's life
Now wears his crown.

HAMLET O my *prophetic* soul.
My uncle! (1.5.35-41, emphasis added)

1 幕 2 場ではそれを明言することはないものの、Claudius の表向きの思いやりの姿勢の言葉尻を捕えて皮肉たっぷりに敵対心をあらわにしている。

KING But now, my cousin Hamlet, and *my son*—

HAMLET A little more than kin, and less than kind.

KING How is it that the *clouds* still hang on you?

HAMLET Not so much, my lord, *I am too much in the 'son'.*

(1.2.64-67, emphasis added)

Claudius が Hamlet のふさぎ込む様子を「雲がかかる」と表現したのを受け、Hamlet は'son'を太陽と息子の両義に用いて「太陽の光を浴びすぎている/息子になるのはまっぴらごめんだ」と拒絶する¹⁰。

しかし、自信に満ちあふれる Claudius はそんな Hamlet の態度をものともせず、自分のことを父だと思いがいいと話し、Wittenberg には行かないでほしいと切り出す。

KING *We pray you throw to earth*

This unprevailing woe, and think of us

As of a father, for let the world take note

You are the most immediate to our throne,

And with no less nobility of love

Than that which dearest father bears his son

Do I impart toward you. For your intent

In going back to school in Wittenberg

It is most retrograde to our desire,

And we beseech you bend you to remain

Here in the cheer and comfort of our eye,

Our chiefest courtier, cousin, and our son.

(1.2.106-17, emphasis added)

後に、Claudius が身の危険を感じ、Hamlet のイギリス送りを考えるようになることを鑑みると、このことを切り出すのが Gertrude ではなく、Claudius であるのは重要である。しかし、この科白では子を思う父親を装いながらも、あえて royal we を繰り返し用いることで、自分こそがデンマークの王位に就いたのだということを高らかに宣言しているのである。

1 幕 5 場、Hamlet は父親の亡霊から Claudius の先王殺しのことを聞き、復讐を誓うが、その直後、追いかけてきた Horatio たちに必要な場合には気

違いのふりをすることがあると話す。

HAMLET

But come,

Here as before: never—so help you mercy,

How strange or odd some'er I bear myself

(As I perchance hereafter shall think meet

To put an antic disposition on)—

That you . . . (1.5.166-71)

この“antic disposition”はHamletの意図としては復讐の遂行にあたり周りを欺くために導入されたモチーフであるが、劇が展開するにつれ、Opheliaは本当に気が狂ったと信じ込み自分が狂ってしまい、Gertrudeは母として心から心配し、Claudiusは途中、佯狂を見抜き、逆に自分の身の安全を確保するための口実として利用するということに、劇中、様々に形を変えて機能していく。

5.2 Claudius, Hamletの佯狂を見抜いていない

1幕3場でPoloniusはOpheliaにHamletと口をきくことを禁じ、2幕1場でOpheliaがHamletの様子を報告に来たとき、PoloniusはOpheliaへの愛のため気が狂ってしまったと思い込む。

OPHELIA No, my good lord, but as you did command

I did repel his letters and denied

His access to me.

POLONIUS That hath made him mad. (2.1.105-07)

2幕2場ではClaudiusはまだ佯狂を見抜いていないのであるが、急ぎRosencrantzとGuildensternを呼び寄せる。

KING Welcome, dear Rosencrantz and Guildenstern.

Moreover that we much did long to see you

The need we have to use you did provoke

Our hasty sending. Something have you heard

Of Hamlet's transformation — so call it

Sith nor th'exterior nor the inward man
Resembles that it was. *What it should be*
More than his father's death, that thus hath put him
So much from th'understanding of himself
I cannot dream of. I entreat you both
That, being of so young days brought up with him
And sith so neighboured to his youth and haviour,
That you vouchsafe your rest here in our Court
Some little time, so by your companies
To draw him on to pleasures and to gather
So much as from occasion you may glean,
Whether aught to us unknown afflicts him thus
That opened lies within our remedy. (2.2.1-18, emphasis added)

自分の先王殺しがばれていないと思い、「その原因は父親の死以外には考えられない。二人が原因を探り出せば、解決策もあるだろう」と話すが、ここでは Claudius の意図を字義通りに解釈していいであろう。そこへ、Polonius が登場し Ophelia への愛ゆえだと自信たっぷりに話し、さらには 3 幕 1 場で実行されることになる Ophelia と Hamlet とのやりとりを二人で壁掛けの後ろから伺おうという計画を提案する。

POLONIUS You know sometimes he walks four hours together
Here in the lobby?

QUEEN So he does, indeed.

POLONIUS At such a time I'll loose my daughter to him.

Be you and I behind an arras then,
Mark the encounter: if he love her not
And be not from his reason fallen thereon
Let me be no assistant for a state
But keep a farm and carters. (2.2.157-64)

一方の Hamlet はたまたま宮廷にやってきた劇団を使って亡霊のいう先王

殺しが真実なのか探ることを思いつき、第2幕は終了する。

HAMLET For murder, though it have no tongue, will speak
With most miraculous organ. I'll have these players
Play something like the murder of my father
Before mine uncle. I'll observe his looks,
I'll tent him to the quick. If 'a do blench
I know my course. The spirit that I have seen
May be a de'il, and the de'il hath power
T'assume a pleasing shape. Yea, and perhaps
Out of my weakness and my melancholy,
As he is very potent with such spirits,
Abuses me to damn me! *I'll have grounds
More relative than this. The play's the thing
Wherein I'll catch the conscience of the King.*

(2.2.528-40, emphasis added)

5.3 Claudius, Hamlet の佯狂を見抜く

これまで Claudius は王殺しがばれていないことに確信を持っていたのであるが、第3幕に入り、Hamlet の佯狂を見抜き、劇中劇で王殺しが演じられると、いよいよ二人の対立の緊迫感の本質的なものになっていく。3幕1場は Claudius, Rosencrantz と Guildenstern の3人の対話の途中から始まる。

KING *And* can you by no drift of conference
Get from him why he *puts on* this confusion,
Grating so harshly all his days of quiet
With turbulent and *dangerous* lunacy?

ROSENCRANTZ He does confess he feels himself distracted
But *from what cause 'a will by no means speak.*

GUILDENSTERN Nor do we find him forward to be sounded
But with a *crafty madness* keeps aloof

When we would bring him on to some confession

Of *his true state*. (3.1.1-10, emphasis added)

このやりとりからわかるように3人の間ではHamletの気違いぶりが見せかけであることが了解済みである。Claudiusの科白の“put on”, Guildensternの“a crafty madness”がそのことを示し、それがHamletの“true state”でないことを見抜いている。こうしてHamletの狂気が見せかけであることがわかると、Claudiusは劇中初めて「危険」を口にする。第2幕冒頭ではHamletの狂気の原因が問題であったのに対し、ここではなぜHamletは狂気を装うのかが問題となっている。その後、ClaudiusとPoloniusがHamletとOpheliaのやり取りを陰から伺う場面が続き、その時のHamletの科白は、Claudiusたちの立ち聞きをHamletが気付いているのかいないのか議論がわかれる箇所、どちらなのか断定はできないであろう。

HAMLET Where's your father?

OPHELIA At home, my lord.

HAMLET Let the doors be shut upon him that he may play the fool
nowhere but in's own house. (3.1.129-32)

一方のClaudiusは二人のやり取りを聞いた後、さらに身の危険を感じる。

KING Love! His affections do not that way tend.

Nor what he spake, though it lacked form a little,

Was not like madness. There's something in his soul

O'er which his melancholy sits on brood

And I do *doubt* the hatch and the disclose

Will be some *danger*— which for to prevent

I have *in quick determination*

Thus set it down. He shall *with speed* to England

For the demand of our neglected tribute.

(3.1.161-69, emphasis added)

Hamletは狂っているのではなく、別の理由がある。Claudiusはそれが今後危険を生み出すことを恐れ、急ぎHamletをイギリスに遣わすことを思いつ

く。この科白には“doubt,” “danger” という恐怖を示す単語に加えて、さらにその危険には急ぎ対応しなくてはならないという Claudius の緊迫感が“quick determination” “with speed” という語に表現されている¹¹。しかし、娘への愛ゆえだと確信する Polonius は劇の後、Gertrude と Hamlet とのやり取りを再度壁掛けの背後から伺うことを提案する。

5.4 兄殺しの劇中劇

続く3幕2場の劇中劇は二人の衝突に決定的な影響を及ぼす。劇冒頭では Claudius は自分の犯した殺人に誰も気付いていないという自信があったのが、この場で Hamlet には知られていることを理解するからである。

The trumpet sounds. Dumb-show follows.

Enter [Players as] a king and a queen embracing him and he her. He takes her up and declines his head upon her neck. He lies him down upon a bank of flowers. She seeing him asleep leaves him. Anon come in [a Player as] another man, takes off his crown, kisses it, *pours poison in the sleeper's ears* and leaves him. The queen returns, finds the king dead, makes passionate action. The poisoner with some three or four [Players] come in again, seem to condole with her. The dead body is carried away. The poisoner woos the queen with gifts. She seems harsh awhile but in the end accepts love.

[Exeunt] (3.2.128, emphasis added)

まず黙劇が演じられるが、ここで鍵となるのは王を殺すのにその耳に毒薬を注いだという点である。これは、1幕5場で Hamlet が亡霊から得た情報を劇に盛り込んだものののだが、Claudius にとっては先王殺しの具体的な手段まで演じられた、その不安と焦りは想像に難くない。また、Hamlet は劇の最中、Chorus 役よろしく劇の解説をする。

LUCIANUS Thoughts black, hands apt, drugs fit, and time agreeing,

Considerate season else no creature seeing.

Thou mixture rank, of midnight weeds collected,
With Hecate's ban thrice blasted, thrice infected,
Thy natural magic and dire property
On wholesome life usurp immediately.

[Pours the poison in his ears.]

HAMLET *'A poisons him i'th' garden for's estate. His name's Gonzago. The story is extant and written in very choice Italian. You shall see anon how the murderer gets the love of Gonzago's wife.*

OPHELIA The king rises.

QUEEN How fares my lord?

POLONIUS Give o'er the play.

KING Give me some light, away.

POLONIUS Lights! Lights! Lights! (3.2.248-62, emphasis added)

特に毒薬を注ぐ場面に至ったときの Hamlet の解説は自分は Claudius の先王殺しを知っているのだという姿勢を示すもので、Claudius に決定的な恐怖を与える。この劇は Hamlet が亡霊の言葉が真実なのかを確かめるために仕組んだものである一方、Claudius の側では自分の殺人行為が Hamlet に知られていることを知り、恐怖感を深めていくという働きもしている。これまで漠然と感じていた恐怖が、ここで命が狙われていることをはっきりと自覚するようになるのである。Hamlet としては Ghost の言葉が本当なのか確かめるために劇を仕組んだのであり、その目的さえ達成すれば足りるところを、あえてこのような解説をしている。登場人物の意図の整合性を犠牲にしても、劇の展開に必要な要素、つまり Claudius に Hamlet の意図を知らせ、恐怖心を深める効果を狙っていると考えることができる。

3 幕 3 場冒頭、登場した Claudius はまず “I” という代名詞を用いて自分の個人的な恐怖を表現したかと思うと、同じ 1 行目で royal we を用い、国王たる立場の者にとっての危険であると理由を微妙にすり替えて、その立場から勅書をしたため Hamlet をイギリスにやろうと話す。

KING *I like him not, nor stands it safe with us*
To let his madness range. Therefore prepare you.
I your commission will forthwith dispatch
And he to England shall along with you.
The terms of our estate may not endure
Hazard so near *us* as doth hourly grow
Out of his brows. (3.3.1-7, emphasis added)

Arden 版、第3版の註によればこの“commission”は5幕2場で Hamlet が Rozencrants と Guildenstern から奪った勅書であろうと解説している¹²。しかし、ここではまだ Claudius は Hamlet 殺害までは意図していないと考えるのが妥当である。まだ、勅書は書かれていない上、2行目で「Hamlet の狂気が自由に動き回るのが危険である」と述べていることから、投獄・幽閉を考えているのだらうと推測できる。直後の

KING Arm you, I pray you, to this speedy voyage
For we will *fetters* put about this fear
Which now goes too *free-footed*. (3.3.24-26, emphasis added)
「今自由に歩き回っているこの恐怖に足かせをはめる」という表現もこの考えをサポートするものである。また、この場の独白で Claudius は兄を殺した罪を悔い、祈ろうとするのであるが、自分の罪の悪臭が天まで臭うと嫌悪感さえ感じていることを考えると、さらなる殺人をこの時点で意図しているとはとても考えられない。

KING *O, my offence is rank: it smells to heaven;*
It hath the primal eldest curse upon't—
A brother's murder. Pray can I not:
Though inclination be as sharp as will,
My stronger guilt defeats my strong intent
And like a man to double business bound
I stand in pause where I shall first begin
And both neglect. (3.3.36-43, emphasis added)

一方の Hamlet は祈る Claudius を見つけ、今なら殺せると思いつつ、見逃してやる。

HAMLET Now might I do it. But now 'a is a-praying.

And now I'll do it [Draws sword.] — and so 'a goes to heaven,

And so am I revenged! That would be scanned:

A villain kills my father, and for that

I, his sole son, do this same villain send

To heaven.

Why, this is base and silly, not revenge. (3.3.73-79)

ここで Hamlet なの見逃す理由、祈りの最中に殺したのでは敵を天国にやっしまい、復讐にならないと述べるのだが、劇の展開から考えると、Claudius にとっても Hamlet にとってもまだ殺意が十分には深まっておらず、今後の進展が待たれるからだと考えてよいであろう。

5.5 Polonius, Hamlet に殺される

続く 3 幕 4 場で、Hamlet と Gertrude のやりとりを壁掛けの陰で盗み聞きしていた Polonius は Hamlet に殺されてしまう。

POLONIUS [behind the arras]

What ho! Help!

HAMLET How now! A rat! Dead, for a ducat, dead!

[Kills Polonius.]

POLONIUS O, I am slain!

QUEEN O me, what hast thou done?

HAMLET Nay, I know not. Is it the king? (3.4.21-24)

Gertrude の何をしたのかの問いに Hamlet はまず、“Nay, I know not.” と答え、この殺人は熟慮した上での殺人ではなく、偶発的なものであることは明らかであるが、すぐ後で相手が Claudius だと思って殺したことを Hamlet は明言している。

HAMLET [Uncovers the body of Polonius.]

—Thou wretched, rash, intruding fool, farewell:
I took thee for thy better. Take thy fortune;
Thou find'st to be too busy is some danger.

(3.4.29-31, emphasis added)

この Polonius 殺害により、Claudius は自分の命の危険性を感じるようになり、4 幕 1 場以降、いよいよ二人の生死を賭けたぶつかり合いが展開されていくことになる。一方、Polonius が殺されたことが発端となって、Ophelia は気が狂い、Laertes がフランスから帰国して Hamlet への復讐を誓い、と結末に向かう別の plot の流れが出来上がる。

4 幕 1 場で Gertrude から Polonius 殺害の件を聞いた Claudius の頭の中には「Polonius の死イコール自分の死」という構図が出来上がり、自分の命の危険を直接感じる。

KING O heavy deed!

It had been so with us had we been there. (4.1.12-13)

このことが引き金となり、Claudius は Hamlet 殺害を考えるようになる。

KING And England, if my love thou hold'st at aught
As my great power thereof may give thee sense,
Since yet thy cicatrice looks raw and red
After the Danish sword, and thy free awe
Pays homage to us, thou mayst not coldly set
Our sovereign process, which imports at full
By letters congruing to that effect
The present death of Hamlet. Do it, England!
For like the hectic in my blood he rages
And thou must cure me. Till I know 'tis done,
Howe'er my haps my joys will ne'er begin.

(4.3.56-66, emphasis added)

4 幕 3 場の最後の独白で Hamlet を即刻殺すようにという内容の勅書を Claudius がイギリス王にしたためたことが明らかになるのであるが、そんな

勅書を書いたとは周囲に悟られることなく、Hamlet が狂っていることを口実に Hamlet のイギリス行きを決定し、自らの手は汚さずに Hamlet を死に追いやるこの計画に、奸計をめぐらすことに長けた Claudius の性質が見取れる。一方の Hamlet は Polonius を殺した 3 幕 4 場の最後に Gertrude にイギリス行きの件を話す。

HAMLET I must to England — you know that.

QUEEN Alack, I had forgot; 'tis so concluded on.

HAMLET There's letters sealed and my two schoolfellows —

Whom I will trust as I will adders fanged —

They bear the mandate, they must sweep my way

And *marshal me to knavery*. Let it work.

For 'tis the sport to have the engineer

Hoist with his own petard, and't shall go hard

But I will delve one yard below their mines

And blow them at the moon. O, 'tis most sweet

When in one line two crafts directly meet.

(3.4.198-208, emphasis added)

勅書には封がなされ、学友の二人がその勅書を持って自分を罠に導こうとしていることをすでに Hamlet は知っており、そのさらに深くに坑道を掘って、二人を月に向かって爆破させようと言う。

4 幕 3 場で Hamlet 殺しを意図しながらも「お前の身の安全のためだ」と取り繕う姿勢を崩さない Claudius に対し、Hamlet は真実を見抜く力を持った“cherub”が Claudius の意図を見抜いていると言う。

KING Hamlet, *this deed for thine especial safety* —

Which we do tender, as we dearly grieve

For that which thou hast done — must send thee hence.

Therefore prepare thyself:

The bark is ready and the wind at help,

Th'associates tend and everything is bent

For England.

HAMLET For England?

KING Ay, Hamlet.

HAMLET Good.

KING So is it if thou knewest our purposes.

HAMLET *I see a cherub that sees them.* But come, for England.

(4.3.39-47, emphasis added)¹³

そして“*But come, for England.*”の科白には、自分を陥れる計画であることを悟りながらも、真っ向からその計略に立ち向かおうという Hamlet の毅然とした態度を見て取ることができる。そしてこの勝負は、Hamlet が坑道の比喻で表現した通りとなるのだが、この経過は4幕6場と7場で断片的に、5幕2場でその全容がようやく観客に知らされる。Hamlet は Rozencrants と Guildenstern のポケットを探り勅書を盗み出し、変わりに二人を殺すようにと書き換えた手紙を戻し、翌日船は海賊に襲われたため、自分だけが捕虜になりデンマークに戻ることにになり、Rozencrants と Guildenstern はイギリスで殺される運命にあるのだと。

5.6 Claudius, Laertes を Hamlet 殺しの手先に仕立て上げる

3幕4場の Polonius 殺害が発端となってもう一つの plot の流れが出来上がり、それが結末へとつながっていくことになる。4幕5場、Ophelia は狂ってしまい、そこに Laertes が復讐しようとフランスから帰国したところ、Claudius は巧みな話術で Laertes を言いくるめ、4幕7場では Hamlet 殺しの手先にまで仕立て上げる。第4幕の最後で Ophelia が死んだことが報告されるのであるが、plot 展開により Laertes の中に父と妹の復讐という動機を作り上げる。また一方で Claudius は Laertes の武術に対する自尊心をくすぐり、父親への思いを刺激することで、Laertes の復讐に向かう態度が自発的なものであるかのように思わせる工作をしている。

KING Laertes, was your father dear to you?

Or are you like the painting of a sorrow,

A face without a heart?

LAERTES

Why ask you this? (4.7.105-07)

できるだけ自分の手を汚すことなく、汚いやり口で Hamlet の命を狙おうとする狡猾な Claudius に対し、Hamlet は Claudius の命を狙うという基本的な姿勢は常に保ちつつも具体的な方策を考えることはない。具体的な方策を取った瞬間に狡猾な Claudius と同類になり、悪の要素を帯びてしまうからである。しかし、4 幕 7 場で Claudius に届く Hamlet の手紙は、Hamlet が自分の命を狙う本人の元に敢えて戻り、命を賭けてその戦いに自ら臨むことを宣言する一種の挑戦状だと読むことができる。

KING

Laertes, you shall hear them.

Leave us.

[Exit Messenger]

[Reads.] *High and mighty. You shall know I am set naked on your kingdom. Tomorrow shall I beg leave to see your kingly eyes. When I shall (first asking you pardon) thereunto recount the occasion of my sudden return.*

What should this mean? Are all the rest come back,

Or is it some abuse, and no such thing? (4.7.41-48)

5.7 復讐の手段を手にする Hamlet

5 幕 2 場、Hamlet は Horatio に自分の意図がどんなに荒削りでも結果を作り出す“devinity”神の意図があるのだと話すが、その通り、復讐劇の結末は Hamlet の意図により作り出されるのではなく、劇中存在する“devinity”によりもたらされることになる。

HAMLET

Rashly—

And praised be rashness for it—let us know

Our indiscretion sometime serves us well

When our deep plots do fall—and that should learn us

There's a divinity that shapes our ends,

Rough-hew them how we will. (5.2.6-11, emphasis added)

毒の塗られた刃で傷を受け、自分の命があと半時間もないと知ったとき、ようやく Hamlet は復讐の手段を手にする。

LAERTES It is here, Hamlet, thou art slain.

No medicine in the world can do thee good:

In thee there is not half an hour of life;

The treacherous instrument is in thy hand

Unbated and envenomed. The foul practise

Hath turned itself on me. Lo, here I lie,

Never to rise again. Thy mother's poisoned—

I can no more—the King, the King's to blame.

HAMLET The point envenomed too? Then venom to thy work!

[Hurts the King] (5.2.298-306)

Hamlet に与えられたこの時間差には大きな意味がある。自分が死ぬことが決定づけられたからこそ相手の命を狙うことができる、自分が殺されることで、それと同じ手段で相手を殺すことになっても自分は悪に堕ちることはない。それは Laertes の言葉によっても裏付けられる。

LAERTES

He is *justly* served.

It is a poison tempered by himself.

(5.2.311-12, emphasis added)

劇中、Hamlet と Claudius それぞれにとっての生と死、それが鏡のように相手の生と死の問題となり、殺すのか殺されるのかという戦いが繰り広げられてきたのであるが、Hamlet は最後に自分の命を犠牲にしなければ、その時が来るまでは、復讐の契機を手にすることはできなかったのである。

6. 結論

以上見てきたように、Hamlet の復讐は単に亡霊に命じられたためだけではなく、自らにとっても母親に対する不信感がひいては自分の恋愛に対する不信感へと発展し、さらに自分の存在意義さえも危うくなる程の動機を与え

られて挑むものであった。その復讐の相手は卑劣で、かつその卑劣さを最大限に発揮出来るだけの有能さも備えている。一方で Hamlet が復讐するにあたって悪の要素を帯びることは、亡霊の命じる言葉からも、腐敗からの浄化を目指す劇構造からも禁じられている。劇が展開するにつれ、二人はどんどん殺意を深めていくのであるが、Claudius が狡猾な手段で Hamlet の命を狙おうとしても、Hamlet は具体的な方策を練ることはない。しかし、劇冒頭から一貫して二人の衝突が水面下で繰り広げられ、最後にはそれぞれの生死を賭けたものへと発展していく。結末で Hamlet に与えられる復讐の契機は決して偶発的なものではなく、plot が展開するにつれ二人が殺意を深めていく劇構造から必然的に与えられたものであると考えることができる。

注

- 1 フロイト、『夢判断（上）』新潮文庫，342-43。
- 2 Catherine Belsey は *Hamlet* の他、*The Spanish Tragedy* や *Titus Andronicus* などの復讐劇における逡巡について広く論じ、この聖書の一節にも言及している。彼女はまた、復讐は不正を正すためとはいえやはり公正ではあり得ないこと、復讐者の良心の呵責、復讐のもつ暴力性とその行為の恐ろしさを復讐者が想像してしまうことを、逡巡の理由として挙げている。Catherine Belsey, *The Subject of Tragedy: Identity and Difference in Renaissance Drama* (London: Methuen, 1985) 111-16.
- 3 William Shakespeare, *Hamlet*, ed. Harold Jenkins, The Arden Shakespeare, 2nd ed. (London: Methuen, 1982) 124.
- 4 R. A. Foakes, "Hamlet's Neglect of Revenge," *Hamlet: New Critical Essays*, ed. Arthur F. Kinney (New York and London: Routledge, 2002) 85-99.
- 5 3 幕 3 場で Hamlet が祈る Claudius を見逃したあとの 3 幕 4 場、亡霊が Hamlet の前に再び現れる。この時、Hamlet 自身が「遅い、ぐずぐずする息子」を叱りにやってきたのかと問うている。

HAMLET Do you not come *your tardy son* to chide
That, lapsed in time and passion, lets go by
Th'imimportant acting of your dread command?
O say!

GHOST Do not forget! This visitation
Is but to whet thy almost blunted purpose. (3.4.103-07, emphasis added)

Hamlet からの引用はすべて、William Shakespeare, *Hamlet*, ed. Ann Thompson and Neil Taylor, The Arden Shakespeare, the third series (London: Cengage Learning, 2006) による。

- 6 Caroline F. E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* (Cambridge: Cambridge UP, 1971) 213.
- 7 l. 143 “should” は The Second Quarto (1604-05) より。The First Quarto (1603) と The First Folio (1623) では過去の習慣を示す “would” となっている。以下、Q2, F1 と表記する。
- 8 G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire: Interpretations of Shakespearian Tragedy with Three New Essays* (London: Methuen, 1967) 20.
- 9 Arden, 337.
- 10 “son” は F1 では太陽を示す “Sun” だが、Q2 では “sonne” となっており、当時はこの形で “son”, “sun” の両方を指すことができた。
- 11 “doubt” は現代英語とは異なり、ここでは「恐れる」という意味である。
- 12 Arden, 326.
- 13 l. 45 の Hamlet の科白は、F1 では “For England?” であるが、Q2 では “For England.” となっており、Hamlet のより毅然とした態度を読み取ることができる。